COLUMN

● シリーズ　私の見た日本　Vol.251

建物を守ることは掃除から
近代建築の現場で学んだ保存と活用の温もり



姜 明采（カン ミョンチェ）

韓国・ソウル生まれ。神奈川大学建築学部特別助教。博士（工学）。（公財）日本ナショナルトラストでの歴史的建造物の保存活用に関わる実務経験を経て、2022年より現職。

横浜との出会いから、近代建築史研究の道へ

横浜という都市の存在を意識するようになったのは、2011年3月のことであった。韓国の大学で建築学科に入学し、日本の建築についてもっと学びたいという思いが湧いたときに、所属大学の交換留学制度で建築を学べる日本の大学の一つが「神奈川大学」であった。これが、私と横浜とのすべてのはじまりである。

外国の文物をいち早く受け入れた開港場としての歴史を持ち、その面影を残す西洋風の近代建築が並ぶ日本大通り周辺と、1990年代以降に開発された超高層ビルが並ぶみなとみらい地区。過去と現代が共存する街並みは、それまで私が目にしてきた街並みとはどこか違う印象で、「自分の目でこの不思議な街を体験してみたい」と思うようになった。

さらに、交換留学の際、授業の一環で参加した日本大通りのまちあるきを通して、この街の魅力は、単に古い建物が残っているだけではなく、「歴史ある建築を守り、次世代へ引き継ごうとする人々の思い」によって形作られていることに気づいた。この発見は、交換留学を終えた後、大学院進学のため再び日本へ戻るきっかけにもなった。

大学院時代は、「日本人が考える日本の建築の特徴は何か?」という問いと向き合う日々であった。そこで研究の対象としたのが、関東大震災の惨禍を記憶し、犠牲者を慰霊するために建てられた震災記念堂（現・東京都慰霊堂、1930年竣工）をはじめとする横網町公園内の震災記念建造物であった。これらは、日本の伝統的建築のモチーフを、鉄筋コンクリート造など西洋の新しい構造技術で具現した「日本趣味」の建築である。こうした建築は、当時の建築家らの間で伝統表現にふさわしいスタイル（様式）や表現手法を中心に語られ、その後の研究でも同様の観点から論じられてきた。しかし、震災記念堂をはじめとする公園内の建造物は、慰霊や納骨という機能に応えながら、震災復興という新時代にふさわしい和風建築を求める一般の人々の要望を反映し、「日本趣味」の建築として完成した。即ち、「日本趣味」の建築の成立において、建築家の設計意図だけではなく、社会の要望も存在していたことを明らかにしたのである。この視点は現在の研究にも引き継がれ、日本を含む東アジアの近代建築において伝統表現がどのように受け入れられ、変化していったのかという問いや、関東大震災後の復興期に東京・横浜で人々の生活の再建を支えた社会施設の建築的役割の解明へと広がっている。そして、この「一般の人々の目線から建築を考える」ことの大切さを実感させてくれたのが、大学院時代から研究と並行して携わった歴史的建造物の保存活用の現場経験であった。

（公財）日本ナショナルトラストの現場で学んだこと
―建物を守る第一歩は掃除―

博士後期課程に在籍していた2017年7月より、（公財）日本ナショナルトラスト（以下、JNT）の専門研究員として歴史的建造物の保存活用に関する実務に携わる機会を得た。学位取得後の2019年5月からは正規職員として、東京の旧安田楠雄邸庭園（以下、旧安田邸）や京都の駒井家住宅、奈良の旧大乗院庭園といった文化財建造物・名勝の保存活用事業、石川県輪島市での文化財保存活用地域計画の作成などを担当した。

特に旧安田邸や駒井家住宅の事業では、大学院時代に学んできた近代建築の魅力を一般の人々に伝え、後世へ継承するための公開管理全般を担った。

とりわけ、ウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計で知られる駒井家住宅（京都市指定有形文化財）の現場では、建築が持つ本来の価値をいかに継承するかという、保存と活用の実務の連続であった。たとえば、経年劣化や破損によりドアノブや照明器具の一つを交換する際にも、安易に現代の製品に置き換えることは許されなかった。まずは余分のオリジナルパーツが残っていないかを確認し、見つからない場合は同時代の建築や同じ建築家が手がけた他の作品を調査した。このように可能な限り当時の設計意図に近い製品を探すほか、専門家や自治体の担当者と製品の選定から修理の方法・時期に至るまで、一つひとつ丁寧に協議と調整を重ねた。また、長年親しまれてきたカーテンが野生動物の侵入によって引き裂かれてしまった際には、できる限りオリジナルに近い生地と仕様を手配するために募金活動を展開した。さらに、建物を観賞対象に留めず、その空間の魅力を日常でも感じてもらうため、美しい緑が広がる庭園でヨガイベントを開催するなど、地域や市民と建築をつなぐ新たな活用の試みも行った。

日々の公開活用を支えてくれていたのはボランティアスタッフの方々であった。ある日、旧安田邸のスタッフの方からかけられた言葉が、今も心に深く残っている。

「建物を守ることは、毎日窓を開けて風を通し、隅々のホコリを払い、床をきれいに拭く掃除から始まりますよ。」

大学院で学んできた建築家の設計理念や複雑な保存理論の前に、「建物をひとつの生き物として愛着を持ち、日常の暮らしの中で慈しむこと」が保存の本質であると気づかされた瞬間であった。ドアノブ一つにまでこだわる専門的な修理が建物の価値を守り、毎日窓を開け、床を拭く人の手が、人々を迎える空間に温もりを吹き込む。この保存と活用の両輪があるからこそ、古い建物は今でも息づき続けているのである。

この体験を経て改めて横浜の街を見渡すと、馬車道から山手エリアに至るまで、今も大切に遺されている近代建築群の姿がさらに違って見えてきた。行政、市民団体、民間企業など守り手は様々であっても、そこに共通しているのは「この大切な空間を次の世代へ残したい」という人々の揺るぎない思いである。毎日の丁寧な手入れと、空間を愛する人々の情熱の積み重ねこそが、日本の近代建築を今日まで輝かせ続けている原動力であり、私自身が建築を学ぶ学生に最も伝えたい姿勢でもある。

次世代に伝える「建築を大切にする気持ち」

2022年より、私はかつて交換留学生として足を踏み入れた横浜の地で、大学教員として新たな歩みを始めている。現在は日本人学生のみならず外国人留学生も対象に、戦前期における横浜の都市・建築史を講義するとともに、実際の建築見学を通して横浜の魅力を伝える活動を行っている。講義や見学では、私がJNTの現場で学んだ「すでに存在する空間に寄り添い、愛着を持って慈しみながら付き合っていくこと」の大切さを伝えることを心がけており、大きなやりがいを感じている。

横浜では、歴史的建造物が人々の日常の温もりの中で未来へとつながっている。この街を舞台に、一人の研究者として、そして教育者として、横浜を彩る近代建築の魅力と「建物を愛する心」を次世代へ伝え続けていきたい。



図3　駒井家住宅



図4　駒井家住宅　竣工時の様子が良く残っている居間



図5　旧安田邸



図1　横浜の近代建築が彩る日本大通りエリア



図2　横浜の絵タイル



図6　三渓園臨春閣の見学（授業の一環で特別に許可を得て見学）



図7　山手・ベーリングホールの見学（授業の一環で実施）